

“石綿がん”3人死亡

悪性 短期間に相次いで

兵庫の工場

百万人に一人の発生率といわれる極めて珍しいがん、悪性中皮腫(ちゅうひしゅ)は、発がん性が問題になっている石綿(アスベスト)の吸引が原因とされているが、兵庫県内にある石綿関連工場の従業員、元従業員三人が昨年から今年にかけて、このがんが相次いで死亡していることが二十七日、明らかになった。兵庫労働基準局は吸引と死亡との因果関係を認め、二人についてすでに労災死と認定しているが、悪性中皮腫による死者を四十八歳(当時)の男性従業員(死亡時、本社勤務)が五十八年末から右側胸部痛を訴え、胸膜中皮腫で死亡したのをはじめ、昨年九月には十二年間石綿パイプや壁材製造に従事した五十八歳(同)の男性(死亡時、工場管理部門勤務)、今年八月には三十二年間、同様作業を続けた五十二歳(同)の男性が相次いで腹膜中皮腫で死亡した。同労働基準局が調べたところ、いずれも体内から悪性中皮腫を引き起こしたとみられる石綿小体が確認され、うち二人を労災認定し、残る一人についても審査中。

悪性中皮腫は、胸膜、腹膜、心膜などを覆う中皮表面やその下層の組織から発生する腫瘍で、発症すると一、二年のうちに死亡するケースがほとんど。診断が難しいが、「大阪中皮腫研究会」(代表世話人、瀬良好澄・国立療養所近畿中央病院院長)は、日本での年間死者数を百人以下、うち胸膜中皮腫によるものを六十七人と推定。欧米の疫学調査では、職業上の石綿吸引歴との因果関係が指摘され、デビュー前、石綿関連職場にいた米国の映画スター、スティーブ・マックイーン(Steve McQueen)の死因として有名になった。

最近になって代替品の開発がクローズアップされ、わが国の石綿輸入量は昭和五十年代半ばの年間約三十万トンをピークに減少の一途。しかし、三十年以上、石綿関連疾患を診断している横山邦彦・国立療養所近畿中央病院理学診療科医長は「石綿が引き起こす

がんの潜伏期間は長く、使用量が減っても関連疾患はむしろこれから増えてくるだろう」と話している。